

出演者：

能舞：観世流能楽師・河村博重（京都造形芸術大学客員教授）

舞踏：舞踏家・由良部正美（スペース ALS - D 主宰）

音：鎌田東二

制作上演意図と概要：

①14世紀から15世紀にかけて世阿弥が大成した「複式夢幻能」は、多く、「諸国一見の僧」が各地を遍歴し、その地で遭遇した霊や痛み^{こころ}に直面し、鎮魂供養と成仏を祈る「天下の御祈祷」であった。本「能舞舞踏 比叡死生谷銀河巡礼」は能の体裁を借りつつ現代の魂の遍歴と死生観探究を表現するものである。

②全体を「序破急」でまとめた。序は導入部、破は展開部、急は終結部である。世阿弥は『風姿花伝』「第三問答条々」の中で「一切の事に序破急あれば^{さるがく}申樂もこれ同じ」と述べ、『能作書（三道）』では「序破急の三体を五段に作りなして、さて詞^{ことば}を集めて、曲^{ふし}を付けて書連ぬるなり。（中略）序破急に五段あり。序一段、破三段、急一段なり」と記し、『習道書』には「能の序破急の事、脇能^{わきのう}は序なり、二番・三番・四番は破にて、事を尽して、五番目は急にて果てて、遊樂成就^{いちえ}の一会なる」と書いている。中でも、「破」はさらに「破の序・破の破・破の急」の三段に分けられ、こうして、一日の演目を「五番立て」とする規準が確立した。また『花鏡』にも「序破急の事」という一章が設けられ、詳しく論及し、「しかれば、序破急の心得、大儀の申樂より初めて、酒盛り、または^{かりそめ}仮初の音曲の座敷までも、次第々々を心得べし」とまとめている。

③本作「鎮魂能舞舞踏 悲とアニマ～いのちの帰趨」においては、「諸国一見の僧」は、第一部序「生界」では、たび重なる自然災害やコロナ禍で苦しむ世界を目撃し、第二部破「死界」では、気候変動による自然災害やコロナ禍や戦乱を生み出す暗黒世界を目の当たりにし、第三部急「生死界」では、「悲」のこころを抱きつつも「アニマ（たましい）」とともに、いのちの根源と平安としての「草木国土悉皆成仏の世界」を求める旅を続ける。

④本作の中で、鎌田東二は、石笛・横笛二種類（龍笛・横笛）・法螺貝二種類（日本・ニュージーランド両国の法螺貝）・神楽鈴・チンシャー（チベットの鈴）・団扇太鼓・ギターを用いて演奏し、ギター伴奏で十曲を歌う。

第一部序 生界 約12分

法螺貝奉奏

語り

1 みなさん天気は死にました

「みなさん 天気は死にました」 Am F Am F G

と 高校三年生の田村君は 言った

その田村君は 生きているか？

五十年も昔のこと

荒れ狂う天地万物

林檎よ

縁は異なるもの味なもの

そのとおりだが

でもね

死んだ天気も 縁次第

そのようになって そのようにある

あるべくして ある

なるべくして なる

世界はそのようにうごいている

縁はそのようにはたらいっている

1ミリ1センチたりとて恣意的ではない

成るべくして成る

在るべくして在る

ありおりはべりいまそかり

青森カルシウムはどこ行った？

臼田甚五郎は飛びのいた

大森から青森まで

その飛躍こそが猿楽芸能

天狗舞

マイトレイヤ

そは如是我聞

聴くべき耳を研いた

研磨研耳

いかつこなく

いかしまぐはひのごと

弘前に

花折れて立つ

やつかみみ

はしぬれど

ねもないど

落穂拾いの姉御を拾った

恐山にて

津軽三味線の

音律たかあま
ぐひのみこと

だがされど
されど木島
みやこじま
いつまで封せど
ねこばばの
影落ち延びて
地に臥せり

やつがれは
しとど
ぬれて
大河の一滴まで
のみほした

ぬれおちど
ぷちそいど
れおなると
はれおから
ひとしづく
はれ ほれ
みれ おれ

行き場なし
溜り場なし
咲き場なし
馬場愛なし

そうだとしても
すべてをいれて
すべてをすてて
本日早々

みなさん 天気は 死にました。

唄

①「探すために生きてきた」3分

探すために生きてきた 道を求めて生きてきた
夢を求めて生きてきた 愛を求めて生きてきた

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 果てしない 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 切りがない
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 とめどない 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 道がない

探すために生きてきた 探し求めて生きてきた
路を求めて生きてきた 愛を求めて生きてきた

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 果てしない 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 切りがない
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 とめどない 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 終わらない

②「犬も歩けば棒に当たる」3分

犬も歩けば 棒に当たる
人も歩けば 暴力に当たる
などてこの世は荒れ果てた
などてこの世に 雪が降る
水の行方を 追いかけて
霞と消えた 夜となる
祈りを凝らして 月を見る
たまふりむすびの 月影よ おけ
おけ おけ おけ (以下、繰り返し)

嵐の晩に人を抱く
呆れるほどに火と燃えた
すべてあの世の星めぐり
すべてあの世に肥担ぎ
君の面影追い求め
夢まぼろしの夜となる
人の情けに涙する
泉枯れても星の夢 おけ
おけ おけ おけ

第二部 死界 約12分

石笛奉奏

語り 1

「あしはらなかくに」1

悉よ

Dm Am Dm Am

ひとしおの海に咲く
流れ花

かたはしの

ひらきのさとの
戻り星

ふりさけみれば

かなしけれ
狂天働地
藻葉
鱧

あらしほのしほのやほじのやしほじのしほのやほあひにます

空は乱れ裂け

地は働哭す

とこしなえに

とこなめに

とこずれた

ところてん

とまどいは

見えず

さても

コロラロン

みやしろと

しずむ

あしなえの

あしびきの

あしたびの

あじろぎり

ひさかたは

悉よ
永遠の巡りのこそこの秋

かき抱いて
逝った
誰もいない海

もはや
せめたりず
おこたらず
こりもせず
ほころびの宵

狂天慟地
泣け
啼け
哭け
とごとくに
嗚呼 あしはらなかくに！
あしはらの なかつ くに！

唄
③「神ながらたまちはへませ」 4分

神ながらたまちはへませ神ながら 神ながらたまちはへませ神ながら
神ながらたまちはへませ神ながら 神ながらたまちはへませ神ながら

岩陰より滲み出して来る 水を探して 夢を探して
向こう岸に渡る 向こう岸に渡る
夢を開いて 夢よ開けと 天晴れ天晴れはへ 天晴れ天晴れはへ

神ながらたまちはへませ神ながら 神ながらたまちはへませ神ながら
神ながらたまちはへませ神ながら 神ながらたまちはへませ神ながら

なけなしの夢が壊れて 行く当てもなく流離う
尽十方未来際 尽十方未来際
夢を開いて 夢よ開けと 天晴れ天晴れ はへ 天晴れ天晴れ はへ

神ながらたまちはへませ神ながら 神ながらたまちはへませ神ながら
神ながらたまちはへませ神ながら 神ながらたまちはへませ神ながら

祈りの言葉は死に絶えても 朝日の中で甦り咲く
尽十方未来際 尽十方未来際
尽十方未来際 尽十方未来際
夢を開いて 夢よ開けと 天晴れ天晴れ はへ 天晴れ天晴れ はへ
天晴れ天晴れ はへ 天晴れ天晴れ はへ

神ながらたまちはへませ神ながら 神ながらたまちはへませ神ながら
神ながらたまちはへませ神ながら 神ながらたまちはへませ神ながら

語り 2

「あしはらなかくに」2

悉よ Dm Am Dm Am
修理固成
あなたが戒めた道を踏み行なう人としてなく
外れ人となって彷徨う
天涯孤浪の旅

打ち砕かれし心の井戸に
一滴の水もなく
世界は砂漠の海に呑み込まれ

<水と神とは同じこと 心の汚れを洗ひきる>

中山みきは中島みゆきと同じこと 心の汚れを歌い取る

うましあしかびひこちのかみ
地のうごめき

あめのみなかぬしのかみ
天のひらかれ

中山みきは「天地日月」と言わず「地天月日」と言い換えた
そのころは？

かけまくもあやにかしこし
身の丈を測れ
心の多寡を図れ

魂の高を量れ

うましあしかびひこぢ
あめのみなかぬし
くにわかひこ
あめわかひこ

くにとこたち
あめとこたち

飛ぶ鳥のあすか
明日香ゆめみし
ちのみあらかと
あめのみあらか

つかへまつり
のぞみまつり
しろたへの

身ぐるみ剥いで
身狂いは 出で
味胡桃 這い出
出口なしのあめつちをみる

そらはあおいろ
ひかりにみちて
すきとおりにいきどおり

<あめづちとてちてけんじゃ！>

④「夢にまで見た君ゆえに」3分

夢にまで見た君ゆえに ひとつかみまでさくゆえに
祈りを込めて届けたい 心尽きるまで果たしたい 仰ぎ見る空と

夢の果てまで君探し この世の果てまで君恋し
届かぬ思いを見届けて いのち尽きても届けなむ 落ちて往く空へ

一日過ぎたら戻れない 時の流れに身をまかせ
この世の果てまで追いかけて 星のかけらとなりにけり

夢の奥まで迷い来ぬ 風に吹かれてさ迷いぬ
どこまで行けども果てしない 祈りの果てまで身を投げて 飛び惑う夢よ

一日過ぎたら戻れない 時の流れに身をまかせ
この世の果てまで追いかけて 星のかけらとなりにつけり

第三部 生死界 約 12 分

横笛奉奏

語り：

預言者

預言者故郷に容れられず Am F Am F G
すべてのノアは嘆く

戦いの火ぶたは切られた
霜焼けの手を厭うことなく
天から突き出てくる槍を受けて
地上に下ろす

火傷と凍傷を繰り返して裏返る
背徳の将校たちよ

すべてに意味があり
すべてに忌みがある

呑み込めないものはない

だがしかし
生が死を孕み
史を開き
詩を詠う

歌え
滅びの歌
バビロンは燃えた

預言者が視たとおりに

歌え

甦りの歌

ナウシカは知った

腐海の底の底からのメッセージを

見よ

砂漠の遙か彼方に海がある

見えるか 海が

涸れた泉を覗き込んでいる無数の眼

絶望を滴らす眸

飛び込んでくるヒヤシンス

青紫のヒヤシンスを風信子とも飛信子とも書く今宵満月

信子は風に吹かれてそよぐのだ

信子は飛んで飛んで飛んで行くのだ

不知火の海までは遠い

でもしか し

遠くとも飛べる

見る前に飛べ

風が吹いてくるから

プネウマの舟に乗って

流星がまたたくあいだ

不知火の海の底から天の御座に檜の手紙が届いた

唄

⑤「君の名を呼べば」4分

ああ ああ ああ ああ ああ ああ

君の名を呼べば 君の名を呼べば 君の名を呼べば 君の名を呼べば

打たれて 雨 (アーメン)

ああ ああ ああ ああ ああ ああ

君の名を呼べば 君の名を呼べば 君の名を呼べば 君の名を呼べば

どしゃぶり 雨 (アーメン)

南無妙法蓮華經 (4回) 南無阿弥陀仏 (4回)

のうまくさまんだば一だらだんせんだんまかろしゃだそわたやうんたらたかんまん

おんあぼきゃべいろしゃのうまかぼだだまにはんどまじんばらはらばりたやうん

のうぼうあかしゃきゃらばやおんありきゃまりぼりそわか

オンアミリタテイセイカラウン (3回) オンソラソバテイエイソワカ (3回)

南無神変大菩薩 (3回) 南無大師遍照金剛 (3回) 南無日蓮大上人 (3回)

オンマニペメフーム (4回) キリエ・エレイソン (4回) アラー・アクバル (4回)

神ながらたまちはへませ (4回)

ギャーティ ギャーティ ハラギャーティ ハラソウギャーティ ボウジーソワカ 般若心経

ああ ああ ああ ああ ああ ああ

君の名を呼べば 君の名を呼べば 君の名を呼べば 君の名を呼べば

どしゃぶり 愛 (会い・合い)

⑥「神」4分

この苦しみの中に神が在る この悲しみの中に神が居る

神は森に住んでいるけれど 人の心の森にも住んでいる

この激しさの中に神が在る この慎しみの中に神が居る

神は海に住んでいるけれど 人の心の海にも住んでいる

開け天地 吹けよ山河 つながれ天地 結ばれよ山河

この痛みの中に 神が在る この静けさの中に神が居る

神は天に住んでいるけれど 人の心の天にも住んでいる

この喜びの中に神が在る この祭りの中に神が居る

神は祭りの中に現われるけれど 祈る心の中にも現われる

開け天地 吹けよ山河 つながれ天地 結ばれよ山河

開け天地 吹けよ山河 つながれ天地 結ばれよ山河

⑦「銀河鉄道の夜」 4分

この地球から見ると銀河は白い乳の流れに見えて夜空を彩る

その夜 ケンタウルスの祭りではくは不思議な夢を見た

銀河の夜汽車に乗って星の世界を旅する夢だった

あの空の果てまで ぼくたち二人で まことのさいわいを 探しに行こう
カンパネラ星の星までぼくは旅をする カンパネラ星からぼくは飛んでゆく

この宇宙の中で地球はいのちと苦悩に満ちた星として輝く
その夜 銀河の渦の中でぼくは孤独な星となる
いっしょに行こうと誓ったきみはどこにいるのか教えて 教えて

あの空の果てまで ぼくたち二人で まことのさいわいを 探しにゆこう
カンパネラ星の星までぼくは旅をする カンパネラ星から独りで飛んでゆく
あの空の果てまで ぼくたちみんなで まことのさいわいを探しにゆこう 探しにゆこう 探しにゆこう

語り

メコン

メコン

C F C F C f G

棚の上の骨壺を抱いて
夕焼けの散華の海に入る

人知れず葬りの蛾
矢板の上に意気消沈した雪だるまが
悶えた

この世の果てまで飛んで来たよ
誰にも見られず
何人にも咎められず
靴下を履いたまま飛び込んだ
おまえの胸に
メコンよ

防ぎようもない空と
喘ぎ見るばかりの
おまえの喉元
ぬめりと流れてゆく舌先を
衝立は途絶えた

メコンよ
何というなつかしさの奥に
蜜蜂がつつき合って
互いを刺し殺す現場を

生まれたばかりの
二日月の生卵
割れぬまま呑み込んだ
おまえの度量

いくばかり
いかばかりかと
捨て石に訊く
死後の生存を

名ばかりの孤独に
唯名論者は躓く
明日を信じないくせに
明日を待ち望む偽善者よ
サンクトペテルブルグまで
日傘をさして
揺籃の扉
消え果てし秀妻
海鮮問屋の蛸と消ゆ
うつばりの夜汽車で

さあ ひらいて
おまえのまたを
ちのはてまでつづく
あめのやちまた

だが ちまたには季節外れの雪が降っていた
熱帯夜のメコンの夜なのに

恐れ多くも畏くも
狂天働地の凧上がる

だがたとえ 天地がひっくり返っても
あめつちをつなぐ母なる河として
あなたは 流れつづける C F C F C f
この世の果てまで G 流れつづける C F C F C f
地の涯てまでも g

(石笛・法螺貝奉奏)